

福井県済生会病院 集学的がん診療センター／がん教育特別授業「生きる」の教室



子どもたちに正しいがんの知識を
がんってなに？
命の尊さ、人を支えることとは？

3月4日に福井県済生会病院が主催した特別授業「生きる」の教室には、約120名の小中学生やその保護者の方が参加。患者さんの体験談や医師の講演等を通して、がんの正しい知識、命の尊さ、社会全体で人を支えることの大切さを学んでいただきました。



開会あいさつ
福井県済生会病院
院長 登谷大徳

今は2人に1人ががんを診断される時代ですが、今日はいれば治るがんがいっぱいあり、健康診断をしっかりと受ければ何となくいことを、まず賢く選んでください。当病院は集学的がん診療センターを開設して、患者さんを支えています。がんの患者さんにやさしい社会、がんを寄り添うのいなく、がんを克服する社会、一緒に動きましょう。



福井県済生会病院
集学的がん診療センター長
宗本義則

講演
がんを知る
がんは特別な病気ではない

それが増進して約1100人のがん、さらに大きくなり早期がん、進行がんが進みます。彼らががんになるまでが10〜30年で、その後が短いのが、がんが広がることを避けて、がんが細胞として最初に発生した場所、原発臓器から、血管やリンパ管に入り込み、血液やリンパ液の流れに乗って別の臓器や器官に移動し、そこで増えることを転移、といいます。



山田きえさん

今はこんな元気ですが、私は3回もがんを体験しました。1回目は薬性リンパ腫で、この時は抗がん剤と放射線で治療、2回目も乳がん、女性一審多い病気で、12人に1人がかかるという病気です。私は病院の検査で見つかり、抗がん剤と手術で治療しました。どちらの治療も簡単ではありません、薬の副作用など、つらいこともたくさんありましたが、半年以上の治療を最後まで残ったおかげで、元気になれました。がんは早く見つけて、お医者さんを通してちゃんと治療すれば治る病気です。

体験談
がんになっても、病気の人のそばに行くとあけて
そんな中で、支えになったことがあります。家にも親にも頼りませんでした。体だけがなくとも心もつらかったです。その時の支えが家族や友人、恋人の存在でした。いつもそばにいて励ましてくれました。もし病気の時に病気の人がいたらそばに行くとあけてください。うまく言葉が出なくても、その人に支えられなくても、その人は支えられていてくださっています。

誰が価値のある存在
「人生から期待される」生き方を
会話は言葉で成り立ち人々を繋ぎつなげるけれど、対話とは心と心から大切なこと。また我々が人や物などに対して抱くものは、算数的な法則です。プラスマイナスで元気がなくなり、プラスマイナスがマイナスになります。しかし人生はプラスマイナスがプラスになる、自分より困った人に接すると元気がなくなるはず。我々医療者は2つの使命があります。学問的、科学的な視点で病気を治療すること、社会的責任で手助けする(ヘルプ)こと。この2つが失われれば、「1人の社会的責任で手助けする」を、命をさしたり、家の中に入つたりできる。同じように、病気があっても病人はなくてはならない。病気が単なる個性であって社会をつくりまわす。命がなくなると考えれば、自分の場所を探して見つけてしまおう。命がある限り生きて価値のある存在。死ぬという人の最後の仕事を実行せず、自分の使命や役割を見失い、尽くして行くことで人生から期待される生き方を送れるのです。



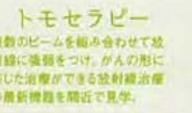
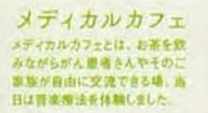
福井県立大学 教授・医学部教授
稲野興夫先生

がん哲学、がん哲学外来って？
日本では1年間に100万人ががんになり、患者数は全体で530万人、5年生存率は62%、近年は上がり、がんも共存する時代になってきています。学校ではがん教育がすすんでおり、がん哲学外来を全国に広げています。

特別講演
がんも単なる個性
心と心の対話で、悩める人に寄り添う

院内見学・体験

内視鏡や超音波をつかった手術体験やメディカルカフェ体験。緩和ケア病棟や放射線治療体験トセラピーの見学が行われ、参加した子どもたちは熱心にかんの診療について学びました。



ラーニングセンター
医療者の研修に使用されるラーニングセンターで、手術に使用される内視鏡や超音波の操作を習いました。

緩和ケア病棟
緩和ケアとは、患者さんのあらゆる苦痛をやわらげること、病気も患者さんやご家族がゆっくりつらくなるよう工夫しています。

トモセラピー
複数のビームを組み合わせて放射線治療を。がんの形に応じて治療ができる放射線治療の最新機器を間近で見学。



福井テレビ福井青貴子アナウンサーが、メディカルカフェ体験を担当した音楽療法士・稲田真美さんの演説に合わせて、命の尊さ、支え合う大切さをテーマにしたローレンス・フルン二シンの絵本「だいじょうぶだよ、ソウさん」と、谷川俊太郎氏の詩「生きる」を朗読しました。